

Title	日本語のリズムに関わる基礎的考察とその応用
Author(s)	土岐, 哲
Citation	阪大日本語研究. 1995, 7, p. 83-94
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/8776">https://hdl.handle.net/11094/8776</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日本語のリズムに関わる基礎的考察とその応用  
Basic Theory on the Rhythm of Spoken Japanese  
and It's Application

土 岐 哲  
TOKI Satoshi

キーワード：話しことば，リズム，音数律，音韻論的音節，音声学的音節，  
音節構造，音節主音，二連音節，長音節，短音節，拡大長音節

本稿の目的は、改めて話しことばのリズムの問題を採り上げ、より現実的に見ようとするものであるが、以下のような順で考察する。

0. 序（リズムの定義）
1. 考察のとりかかり：定型詩リズムの二面性
2. 話しことばのリズムの基礎理論
- 2-1. 二連音節の内訳
- 2-2. 語構成を越えた区切り意識
3. 応用につながる記述への追究
4. 結び

序

ここで言う「話しことばのリズム」とは、原則として、次のような考えによるものである。

ことばのリズムは、個々の言語や方言の音声的特性によって基本的に異なった現れ方をするが、とくにアクセントの性質と密接に関わっている。例えば、英語などのように強きアクセントを持つとされる場合には、強弱のリズム形式で現れ、日本語のように単語高さアクセントを持つ場合は、多音節語を構成す

る音節の数の配列による「音数律」で構成される。

従って、日本語のリズムについて考えようとするとき、音節の区切り方の問題を避けて通ることはできない。とりわけ、促音や撥音など、いわゆる「特殊拍」あるいは「モーラ音素」などと呼ばれるものが実現された場合の扱いについては種々の考えがあり、複雑である。これらの諸説には、大きく分けて、音韻論的音節の立場によるものと音声学的音節の立場によるものがある。

もとより音韻論と音声学は車の両輪のような関係(服部四郎1971)にあって、どちらが正しいかなどといえるものではない。ある音声の現象を音声学的に、細大漏らさず厳密に観察しようとするれば大掛かりになるし、それらの現象を整理して一定の規則性を抽出しようとするには音韻論的手法が必要とされるからである。ただ、これらの学説を教育に応用しようとした場合、それぞれの立場や性質をよく読み取ってかからなければ、問題を複雑にし、いたずらに学習者を惑わすばかりである。これまでの日本語教育や国語教育で広く採用されてきた、いわゆる「拍感覚」を基調とした方法論が、古くから行われているにもかかわらず、必ずしも成功を見なかったのには、それなりの理由があった。即ち、当事者の多くは、音韻論的解釈がそっくりそのまま音声学的に実現されるかのように無批判に思い込み、学習者が実際耳にする現実の聞こえの現象に正面から向かい合わなかったからであろう。この問題はまた、教師が学習者に対して話しかける際の口調にも、場合によって大きな影響を与えているものと考えられる。

### 1. 考察のと리카かり：定型詩リズムの二面性

日本語のリズムについて論じられたものの多くは、和歌や俳句のような定型詩、あるいはわらべうた等を主な題材として検討したものである。もとより、これらは、日本語のリズムに則って作られるものであるから、リズムの一つの典型を現しているには違いない。しかしながら、いずれも一定の形式に従ったものであるだけに、デフォルメ化されたところがあって、通常の話しことばの例とまったく同じように考えるわけにはいかない側面もある。

例えば、俳句や定形式の語り文句を作ろうとする場面で、われわれは五七調

や七五調の形式実現のために、声を出しながら、ゆっくり1音節毎に指折り数えるというようなことをする。これなどは、いわば、たてまえの音声としての形式通りの発音で、おおむね次のようになる。(表記は現代語の発音に従う)

A: ふ、る、い、け、や、「」、か、わ、ず、と、び、こ、む、  
み、ず、の、お、と、「」(芭蕉)

B: ひ、と、あ、し、ご、と、に、「」、き、え、て、ゆ、く、「」、  
ゆ、め、の、ゆ、め、こ、そ、「」、あ、わ、れ、な、れ、「」(近松)  
一方、これらの文言を声に出して詠み上げた場合には、次のように観察される。

C: ふる いけ や「」、\*か わず とび こむ みず のお と「」  
    ＼  ＼  ＼  ＼  ＼  ＼  ＼  ＼  ＼  ＼

D: ひと あし ごと に「」 きえ てゆ く「」 ゆめ の「」 ゆめ こそ  
    ＼  ＼  ＼  ＼  ＼  ＼  ＼  ＼  ＼  ＼  
    あわ れな れ「」  
    ＼  ＼  ＼

(上のC、Dに付した記号のうち、＼は言わばタクトの振り下ろし、／はその振り戻しを示す。ただし、実際に種々のジャンルの詠法を観察してみると、殆どの場合、C、Dを基本としているが、義太夫等はBの形式のままのようである。Cの「\*」は、音楽で言われる「シンコペーション」のようなものである。)  なお、本稿では、音節構造等を説明する便宜上、「拍」の概念を用いることはあるが、基本的姿勢としては「音節」の概念に従う。「音節」と「拍」との概念の違いは、おおむね次のようである。

#### <音節>

短音節(S) : 母音(V)、子音+母音(CV)、半母音+母音(SVV)  
          子音+半母音+母音(CSVV) (=1拍/1モーラ)

長母音(L) : 上記の短音節+撥音(N)、促音(Q)、長母音の長く引いた部分(R)など(いわゆる「特殊音節」)、-ai, -oi, -uiのiなど。(=2拍/2モーラ)

さて、上記A、Bの例は、仮名一文字分毎に区切っているもので、すべての「拍に該当するもの（特殊音節も含む）」は時間的にほぼ同じ長さで発音されるという仮説、いわゆる「拍の等時性」を直接実現させているかのようである。この「拍の等時性」は、つもりの音声、つまり音韻論的記述であって、必ずしも現実の音声の姿を忠実に表したものではない。即ち、これらの音声の長さを音響学的に調べてみると、母音では狭口母音より広口母音の方が、同系列の子音では無声子音より有声子音の方が実際は長い。更に、アクセントの高さが配置された音節の方が、配置されていない音節より長くなるなどの差があることが分かる。また、注意深く聞いていれば、ある程度ならば、機器に頼らなくても気付くであろう。それを、一般にわれわれが聞いてほぼ同じであると感じるのは、日本語話者として主観的かつ音韻論的に聞いて判断しているからである。

C、Dの例は、いわゆる2音節分（詳しくは2短音節分、以下同様）をひとまとめにして発音することを基調としているが、この方がより自然に聞こえ、実際の発音の仕方に近いであろう。その原因については、現実の諸現象の中から証拠となるような現象を丹念に拾い集める必要があると考える。

これまでに言われていることのひとつは、日本語の多音節名詞の中で圧倒的に多いタイプが4音節語であること。それは4音節語が日本語として最も発音しやすいからであり、その理由こそが2音節をひとまとめにしたものが2つ並ぶという最小限度の安定した姿を示しているからだ（別宮1977）というものである。

他に考えられることは、歌や応援の掛け声に付きものの手拍子である。

E：「ハー ルヨ コイ、ハー ヤク コイ、アー ルキ ハジ メタ・・・」

F：「フレ フレ コー ベ」「ガン バレ ガン バレ コー ベ」

いずれも、2音節ひとまとまりを基調としており、全体の速さに応じて一まとまり毎、あるいは二まとまり毎に一度手拍子が入る。

略称や愛称などの造語法もリズム解明の手掛かりになろう。略称にせよ愛称にせよ、一定の長さのものを圧縮する過程では、最も無理のない、発音のしやすい方向で作られるはずだからである。

G：古いものでは「モボ（モダンボーイ）」「ベア（給料のベースアップ）」

「ハイ カラ」「ゼロ セン(零式戦闘機)」「団 菊(団十郎と菊五郎)」「お茶大(お茶の水女子大)」「国 研(国立国語研究所)」新しいものでは「ワー プロ」「パソ コン」「ドリ カム(Dream's come true)」「チャゲ アス(チャゲ&アスカ)」「ミス チル(Mr.Children)」「シー エム(Commercial Message)」「ハイ テク」「京 セラ」(この中で、歌い手のグループ名などは、今後どれほど言い習わされ続けるものかはさだかでないが、これほどはやり廃りの激しいものであっても、一定のルールに従いつつ、生き生きとして作られ続けるものであるため、採り上げた)

以上の例は、いずれも定型詩やコーラスによる掛け声など、リズムが明確に打ち出され、比較的観察しやすいものであるが、これらの例から、少なくとも次のような規則性が確認できそうである。

I : 日本語のリズムの基本的区切りは、2短音節分ひとまとまりである。ただし、文節、連文節等の前後では、一短音節だけ取り残されることもある。

しかし、これだけでは連結された2音節の内訳について説明されていない。即ち、2音節といえば第1音節目と第2音節目が考えられるが、どんな音節でも、無原則に前後連結し得るのかということである。例えば、A～Dの例では和語ばかりが用いられているところから、そこに登場する音節の種類も、単独の母音/V/、子音+母音/CV/、半母音+母音/SVV/などと限られていて、さしたる問題はない。しかしながら、E以降の例になると、漢語や外来語の例も加わり、いわゆる「特殊音節」(撥音、促音など。「特殊拍」「従属音節」などとも)も参入してくる。実のところ、話ことば一般のリズムについて説明できるようにするためには、この点を避けて通ることはできない。

## 2. 話しことばのリズムの基礎理論

### 2-1. 2連音節の内訳

まず、各地で行なった簡単な実験結果を示す。実施場所は、東京、名古屋、大阪、福岡の各地で、被験者は合計224名、各人の出身地は北海道から九州に及ぶ。方法は外来語と和語のいくつかを仮名文字で提示し、「それぞれの語の発音を考え、一か所だけ区切りを入れるとすればどこで区切るか」を答えてもらったものである。以下は設問に使った語の一部である。

[外来語] :

- 1 ティシュー 2 ティッシュ 3 ロサンゼルス 4 ニュージールランド  
5 ユーゴスラビア 6 ウラジオストック 7 サンタクロース

[和語] :

- 1 まばたき 2 いねむり 3 ざぶとん 4 おうどん 5 おでん

このような調査の場合、外来語と和語とでは和語のほうが不利である。具体的な理由は後述するが、被験者は和語の語構成について何らかの知識を持っていることが多く、その知識が妨げとなって音声面からだけの意識の様子を伺い知ることができにくいからである。その点、外来語ならば比較的有利であるといえる。原語にそれほど詳しい人でない限り、語構成までは考えが及ばないことが多く、音声面での意識が観察しやすいからである。ただし、その外来語も、ある一定の型にはまった知識に馴染んでしまった人の場合には、その「知識」が妨げとなり得る。(→ [外来語] 5、6、7など)

調査の結果は以下の通りであるが、/ /内の数字がそこで区切ると答えた人の数である。

- 1) ティ/208/シュ/ 16/ー 2) ティ/ 23/ッ/201/シュ  
3) ロ/ 14/サ/ 3/ン/205/ゼ/ 2/ル/ 0/ス  
4) ニュ/ 0/ー/ 17/ジ/ 2/ー/118/ラ/ 0/ン/ 2/ド (これのみ計139)  
5) ユ/ 3/ー/ 0/ゴ/ 75/ス/139/ラ/ 6/ビ/ 1/ア  
6) ウ/ 0/ラ/ 1/ジ/ 9/オ/121/ス/ 5/ト/ 4/ッ/ 4/ク  
7) サ/ 0/ン/ 6/タ/117/ク/ 92/ロ/ 9/ー/ 0/ス

これらのデータは、被験者の回答状況をそのまま件数で示したものであり、現実に被験者の一人一人がどういうつもりでこのように回答したかを各地に散らばる224名について追跡調査をしたわけでもない。しかしながら、それで

もなお「ここで区切る」と答えた箇所は特定のところに集中しており、ある事実を物語っているものと考えられる。

1) 「ティシュー」と 2) 「ティッシュ」の回答例で特徴的なのは、区切りの集中している位置が 1) では第 1 音節目直後、2) では第 2 音節目直後となっている点である。ここで既に「2 音節ひとまとめ」の法則性が崩れたかに見えるが、原因は明らかである。即ち、1) で冒頭から「ティッシュ」の 2 音節をひとまとめにしようとする、と、「一」の直前で区切らなければならなくなる。そこに区切りを入れた人もまったくないではないが、全体的に見れば極めて少ない。

2) の「ッ」の直前の場合も同様である。このような傾向は 3) 以下についても言えることである。

3) 「ロサンゼルス」でも冒頭の 2 連音節をまとめようとするれば、「ン」の直前に区切りを入れざるを得ないが、ここでもそういう事態を避けていて、区切りは「ン」の直後に集中している。(「ロ」と「サ」の間に区切りを入れた人は、通常 [ロス] アンゼルス の表示に馴染んでいて、かなり迷った末の選択だったのではなかろうか。)

4) 「ニュージーランド」では、原語構成の知識を優先させた人 (17名) もいたようではあるが、結局は区切りが「ランド」の直前に集中し、3カ所もある「特殊音節直前」の位置はいずれも避けられる傾向にある。

5) 「ユーゴスラビア」でも「一」の直前で区切る人はほとんどいない。ここでは「ユーゴ」という名称を知っている人が「ゴ」の直後で区切っているが「ス」の直後で区切った人はその 2 倍に近い。

6) 「ウラジオストック」の場合、一般には原語本来の区切りとは違った区切り方が浸透しており、「ウラ ジオ」と二つ目の 2 連音節の直後に集中している。

7) 「サンタクロース」でも「特殊音節」の直前は避けられているが、一般に知られた「サンタ」の意識が強いためか、その直後と二つ目の 2 連音節直後の 2カ所に大きく分かれている。

以上のことから、2 連音節の内訳については、次のようなことが導き出される。



II: 「特殊音節」は、原則として一般の短音節に後接する。また、先行音節に従属して長音節を形成するが、長音節の中途に区切りが来ることはない。

## 2-2. 語構成を越えた区切り意識

上で見てきたことは、外来語によるものであった。先にも述べたとおり、外来語では一般的に語構成は正確には意識されにくいから、音声上の区切りなどを調べるのには都合がよい。事実、New-Zealand は、[ニュージー／ランド]、Vladi-vostok は、[ウラジオ／ストック]、Los-Angeles は、[ロサン／ゼルス]であった。それでは、和語ならば語構成を知っている可能性が高いから、リズムの区切りも語構成に大きく左右されると言えるのであろうか。

和語で調査した結果は次のようであった。

- 1) ま/ 48/ば/163/た/ 13/き
- 2) い/ 68/ね/149/む/ 7/り
- 3) ぎ/ 51/ふ/173/と/ 0/ん
- 4) お/ 75/う/148/ど/ 1/ん
- 5) お/135/で/ 89/ん

上記のとおり、和語の例は外来語の例ほどには区切りの集中度がはっきりしていない。しかしながら、全体としてみると、おおむね3対1程度の割合で、語構成よりも2連音節毎の区切りの方が優先されている。語構成がまったく無視されるという程ではないが、やはり2連音節や2連音節の中でも「特殊音節」を後部連結させることの方がいち早く実現される傾向にある。また、5)「おでん」の例で見られるように「特殊音節」の後部連結が2連音節一般より優先される点も例外とはなっていない。

ただ、「おでん」の例で「で」と「ん」の間に区切りを入れた人が89名もあったということについては、もう少し考えてみる必要がある。それは、3)「ぎぶとん」にしても4)「おうどん」にしても、また外来語の例にしても、

区切りを入れる位置についてはもう少し選択の余地があったということ。それともうひとつ、「ん」それ自体は母音ではないが、母音に次いで楽音（声道内部でとくに狭めなどによって邪魔されることなく、きしみ音などを伴わずに一定の時間持続して出される音）であり、音節主音になり得るということもあるため、安心して単独切り離しができたのであろう。更に、この89名中72名までが西日本方言話者であったということも、アクセント等とのからみで何らかの関連があるのかも知れない。

以上のことから、リズムの区切りと語構成の関係については、次のようなことが言えそうである。

Ⅲ：単語連結やいわゆる文節（連文節）内部にあっては、音声上の区切りが語構成より優先され得る。

（ここで単語連結や連文節などというのは、それらが一続きに発音された場合をいう。また「内部にあって」と限定したのは、単語連結にせよ連文節にせよ、その終わりの区切りは、語構成的な区切りそのものであり、音声上の区切りとは微妙に異なるからである。）

### 3. 応用につながる記述への追究

本稿の冒頭部でものべたように、従来の、リズムに関わりのある教育では「拍の等時性」という、いわば音韻論的音節の概念を基調としたものが殆どであった。わずかに、教育科学研究会秋田国語部会・文字指導部会の報告資料の中に長音節、短音節の概念を導入した実践例（秋田国語部会1965）が見られるのみである。この実践例の注目すべき点は、学習者がシラビーム方言話者であり、日本語教育の条件とかなり似ているところであるが、説明が単語レベルの例にとどまっている点が惜しまれる。『発音・聴解』（土岐/村田1989）は、日本語教育に長音節・短音節の概念に基づく具体的練習法を提示した最初のものであろうが擬声語・擬態語の扱いが不十分である。

そこで、これまでに得られた=～=及びその周辺の知見を基に、記述の仕方

を今少し拡大発展させてみたい。

- ① 同一リズムの及ぶ範囲： リズムは、文頭から文末まで同じ速さで続くわけではない。文の情報構造に応じて、大切なところはゆっくりめに、そうでないところは速めに発音される。その「大切なところ」や「そうでないところ」の範囲毎にリズムの微妙な違いが実現するものと考えられる。もっとも短いものとしては「自立語+付属語」の文節や一気に発音された場合の連文節がその「リズム・ユニット」に該当し、前後にはポーズ現される。

例：てん きは/これ から あす のあ さに かけ て/こさ めが パラ  
つき はじめる そう です。

- ② 基本は2短音節連続： 上の例からも分かるように、リズムの基本は2短音節連続であるが、「特殊音節」が混入すると不都合が生じ得る。

例：いや なも んですよ って/いわ れても/ちよ っと。  
いや なも んですよ って/いわ れても/ちよ っと。

- ③ 長音節の優先： 2短音節連続よりは長音節のまとまりが優先されるが、そうすると、短音節が孤立することもある。

例：どん なも んでしよ う かって/いっ てま したけ ど。

- ④ 短音節孤立の条件： 長音節間の短音節、長音節とポーズ、ポーズと短音節に挟まれた短音節は孤立する。

例：どう やっ てか ん がえ た かって/いい ます と/・・・  
お と う と だ っ て/ひ っ し だ っ た ん で し ょ う 。

- ⑤ 拡大長音節（城田1993）による「特殊音節」の重なり： 長音節のまとまりは後接部の性質によって分離可能な場合がある。長母音の長く引く部分、撥音、-a i, -o i, -u iのiはいずれも楽音で、音節主音となり得る性質を備えているところから、遊離して次の音節とまとまり得る。外来語、擬声語・擬態語などの例を考える際に有用である。

例：グ ー ン と お と く・・・ シ ー ン と し た・・・  
ク イ ッ ク タ ー ン ワ イ ン を キ ュ ー ッ と い っ ぱ い

なお、上の「ク イック」「ワ イン を」例のように、本来の「特殊音節」後接のまともりは -a i, -o i, -u i のまともりに優先する。

⑥ 縮約形のリズム：縮約後は簡略化されるが、上記の基本原則を踏襲する。

例：ありがとう ございました。 たべてしまった。

あり がと ございました。 たべ ちまった。

なん だろ うとお もって。 たべ ちゃった。

なん だろ と もって。

おは よう ございます。

おは よご ございます。

なお、長母音などはとくに圧縮されやすい。

#### 4. 結び

まとめとして、長音節 (L)、二連短音節 (SS=L<sup>〃</sup>)、拡大長音節 (L+) の内訳及び基本となるリズムの類型を示す。

<Lの種類>

$$L = S + \{N/Q/R\} \quad L' = \{\emptyset/C\} + \{-a i / -o i / -u i\}$$

$$L'' = SS \quad S = \{V/CV/SVV/CSVV\}$$

$$L+ = L + \{N/Q/R\}$$

<リズムの類型>

便宜上、上記のL~L<sup>〃</sup>をLとし、短音節の孤立をSとして分類する。

LLLL型：ファックスですから、練習なんです、どうしてそうなの

SLLL型：50歳代、危険ですから、若いようです、すごいそうです

LSLL型：パンは買わない、今度やります、全部できない、何を食べたの

LLSL型：いつでも遅い、やっぱりうまい、もうすぐ来そう、本当でしょう

LLLS型：大事な調査、帰れるようだ、何とかなった、今しかないよ

SLLS型：痛いところ、見たいテレビ、2回程で、ご飯ですよ、払いました

SLSL型：5分位、休んでよう、故障でしょう、払いません、旅行したい

LSLS型：行きませんか、割りとできた、もう困った、やっと着いた

以上、できるだけ日常の話しことばの例を用いて類型別に示してみた。紙幅の都合で割愛したが、これらの他にも漢語ならば簡単に個々の例を見つけることができる。このようにさまざまなタイプに分類したりすると、あるいは一層複雑に見えるかもしれない。しかし、これらの基本原則は、いずれも上記のとくに①～⑤の域を出るものではない。個々の文の区切り毎に①～⑤の原則を当てはめていけば、無原則にいろいろな現れ方をするのではなく、自ずと上のように類型化できるという意味である。これらは単に「日本語らしさ」のために考え出したのではない。いわゆる「特殊拍」の有無の知識に自信がなく、日本語を話したり書いたりする度にいつもためらいを感じる人の多いことを知り、問題の軽減を目指すものである。

#### 参考文献

- 教科研秋田国語部会（1965）「発音指導の内容と方法」『教育国語』むぎ書房  
 服部四郎（1971）『言語学の方法』岩波書店  
 別宮貞徳（1977）『日本語のリズム（四拍子文化論）』講談社現代新書  
 城生佰太郎（1988）「ことばのリズム」『月刊言語』Vol. 17, No. 3 大修館書店  
 土岐 哲・村田水恵（1989）『発音・聴解』荒竹出版  
 佐藤大和（1993）「外来語を材料としたアクセントの検討－構造とリズムに着目して－」文部省重点領域研究「日本語音声」平成4年度成果報告書  
 城田 俊（1993）『日本語の音 －音声学と音韻論－』ひつじ書房

（とき さとし 文学部助教授）